

俺たちに明日はないッス

2008(平成20)年10月20日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督＝タナダユキ／原作＝さそうあきら『俺たちに明日はないッス』(小学館刊)より『ロマンス』『揺れています』『教えてください』／出演＝柄本時生／遠藤雄弥／草野イニ／安藤サクラ／水崎綾女／三輪子／ダンカン／田口トモロヲ
(スローラーナー配給／2008年日本映画／79分)

……「やりたい！」しか頭にない17歳って、一体ナニ……？ 17歳が美しい歳だなんて誰が言った！ そんな心の中の叫びが聞こえてきそう……。いかにもおふざけなタイトルの「性」春映画の金字塔に、タナダユキ監督がチャレンジ！ しかしさて、半世紀前の“性”春映画の金字塔『太陽の季節』(56年)と比べてみると、その衝撃度は……？

これも不知、あれも不知。知らないづくし……

この映画のキャッチフレーズは、「これぞ、“性”春映画の金字塔!!」。その原作は、『神童』(06年)、『コドモのコドモ』(08年)と映画化が続く、さそうあきらの幻の傑作として名高い『俺たちに明日はないッス』。しかし私は、まずこのさそうあきらも、幻の傑作の名前も不知。

また、17歳の高校生の青春(性春?)を描いたこの作品では、1971年に南沙織が歌った名曲『17才』がカバーされ、主題歌として使われているが、それを歌う「銀杏BOYZ」も私は不知。

さらに、俳優陣も柄本明の息子で、『あしたの私のつくり方』(07年)、『奈緒子』(08年)、『きみの友だち』(08年)などに出ていた柄本時生と、『幽閉者 テロリスト』(06年)、『世界で一番美しい夜』(07年)などでお馴染みの田口トモロヲは知っているが、その他の高校3年生を演ずる男女は知らない俳優ばかり。

タナダユキ監督に魅かれて行ったが……

このようにこれも不知、あれも不知、知らないづくしの映画の試写に行ったのは、何よりもタナダユキ監督の名前に魅かれたから。彼女が監督した『赤い文化住宅の初子』（07年）はすばらしかった（『シネマルーム13』214頁参照）し、『百万円と苦虫女』（08年）も私は大好き。そんなタナダユキ監督が映画化を熱望した作品だということから、「これは何としても観なければ」と思って行ったが……。

「性」春模様あれこれ

この映画は、比留間（柄本時生）、峯（遠藤雄弥）、安藤（草野イニ）の「3人組」の比留間が主人公。比留間は友野（三輪子）と「やりたい」だけが生き甲斐の典型的な高校生（？）だが、その友野が何と担任の吉田先生（田口トモロヲ）と一緒にラブホテルから出てきたから大ショック。もっとも、戦略家の比留間（？）はそれをネタに、友野に対して「お前とやりたい」と持ちかけたが……？

他方、峯は授業をサボっていた時、公園に倒れていたちづ（安藤サクラ）を助けたことがきっかけとなって、ちづとの間に面白い展開が。母親がおらず父親（ダンカン）に育てられたちづはセックスについてはもちろん、生理についても全然知らないという、今ドキ天然記念物のような女の子。そんなちづから「セックスを見たい」と頼まれた峯は、ちづをポルノ映画に連れて行くことに。そしてその後、「あれ、やってみよ」と迫られた峯は……？

最近の若い男の子は、ええカッコしていてもイザとなるとダメなことが多いようだが、比留間や峯をみているとそのことが明らかに……？ そんな「性」春模様のあれこれは、面白いといえば面白いが……。

17歳って、ナニ？

タナダユキ監督がこの原作に魅かれたのは、きっと「17歳が美しいだなんて誰が言った」という比留間の心の中の叫びに同調し、それを表現したいと思ったため。

17歳、高校3年生といえば微妙な年齢であることはまちがいないが、舟木一夫が1963年に歌って大ヒットした『高校三年生』も、西郷輝彦が1964年に歌って大ヒットした『十七才のこの胸に』も、高校3年生讃歌、17歳讃歌。さらに、1971年の南

沙織の『17才』も「私は今生きている」という最後の歌詞が何とも前向き。しかし、2008年のこの映画の比留間に見る17歳は？

1960年代を代表するアメリカの青春映画『俺たちに明日はない』（67年）は、感化院あがりのクライドと気の強い女ボニーが互いにホレ合い、自動車泥棒をくり返していく物語で、その壮絶なラストシーンは歴史に残る名作だった。ところが、比留間たちはそこまで無茶をやることもできず、悶々とする日々を送るのみ。しかも、いざ友野とやれるチャンス到来となると、なぜか肝心のモノが役立たずというのではあまりにも惨め。『俺たちに明日はないッス』といういかにも自虐的なタイトルがピッタリするところが、また悲哀……？

そんな何とも無為な17歳って、一体ナニ……？

『太陽の季節』の衝撃度の方が……

私たち団塊世代の「性」春映画と言えば、石原慎太郎原作を、長門裕之主演で日活が映画化した『太陽の季節』（56年）。小説では、主人公が勃起したイチモツで障子紙を破るシーンが衝撃的だった。そして、この小説は「太陽族」なる言葉を生み出し、日本中の若者の熱い支持を受けることになった。

したがって、『太陽の季節』こそ私たち団塊世代の「性」春映画。そのインパクトに比べると、平成20年の「性」春映画のインパクトは……？

2008(平成20)年10月21日記